

釧路炭田における戦時下「急速転換」：経験者の証言を中心に

石川，孝織
釧路市立博物館

佐藤，富喜雄
太平洋炭礦

福本，寛
田川市石炭・歴史博物館

<https://doi.org/10.15017/21908>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として．27，pp.49-70，2012-03-23．九州大学附属図書館付
設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：



【調査報告】釧路炭田における戦時下「急速転換」

——経験者の証言を中心に——

石川孝織
佐藤富喜雄
福本寛

一．はじめに

太平洋戦争下の一九四四（昭和一九）年八月二一日、「樺太及釧路に於ける炭鉱勤労者、資材等の急速転換の件」が閣議決定された。これにより、釧路炭田や樺太の炭鉱を保坑・休坑とし、労働力と資材を筑豊・三池・常磐炭田に集中させ、釧路からは約六千名もの炭鉱労働者が九州へ移動した。（本論ではこの労働力移動を「急速転換」と呼ぶ。）

このことについて、樺太を中心とした研究が矢野牧夫^①によって行われている。しかし、釧路炭田においては「年表の一項目」程度であり、例えばまとまって証言が記録されたことはない。経験者の高齢化が進んでいることもあり、筆者らは二〇〇九年から一〇年にかけて、釧路と筑豊において一四名を対象に聞き取り調査を行った。

二．「急速転換」実施と石炭輸送困難という背景

石炭産業は、なにより炭鉱から需要家への安定輸送が図られて成立する。主に九州と北海道に偏在する我が国の炭田からの石炭は、京浜や阪神など主たる工業地帯への輸送を海運に頼ってきた。

第二次世界大戦時、資源確保を目的に占領したオランダ領東インドや英領ボルネオなど「南方」からの石油輸送は、制海権の喪失に伴ない困難を極めたことは知られているが、石炭についても、朝鮮や樺太、満洲、華北からの輸送だけでなく、内地である北海道からも同様であった。^②例えば、一九四四（昭和一九）年三月には、北海道から京浜地区向けの北海道炭は、一九四二年八月～十二月平均の約二〇％に減じ、一九四四年度末にはほとんど皆無となっている。^③

九州炭は一九四二年に開通した関門トンネルを、北海道炭は一九四三

年三月から開始される青函連絡船を経由した鉄道による輸送が中心となった。鉄道による石炭輸送は長距離化し、その輸送の平均距離は一九四〇年の九〇kmから一九四四年の二六〇kmへと大幅に増加している⁽⁴⁾。また、青函連絡船の輸送力だけでは不足で、機帆船を動員し、函館（青森小湊（現平内町）の補完輸送や東北各港への輸送が行われている。さて、北海道炭のうち釧路炭においては、根室本線が經由する狩勝峠により、その輸送量は極めて限られていた。つまり、釧路炭は道東地域向けを除きその輸送を完全に海運に依存しており、その困難は生産した石炭を限りなく無価値にする。一九四〇年から四五年までの釧路港輸移出量を図1に示す。

そのため、先述のとおり、一九四四年八月、一般炭のみ生産する釧路炭田では、さらに輸送が困難であった樺太の炭鉱とともに、保坑・休坑となった。

閣議決定では、その理由を「戦局の推移に伴う海上輸送力の逼迫に因り樺太及北海道釧路地方に対する配船は今後殆ど之を期待し得ざる現状に鑑み右両地方に於ける炭鉱の徹底的整理を断行しその保有する勤労者、資材等は挙げて

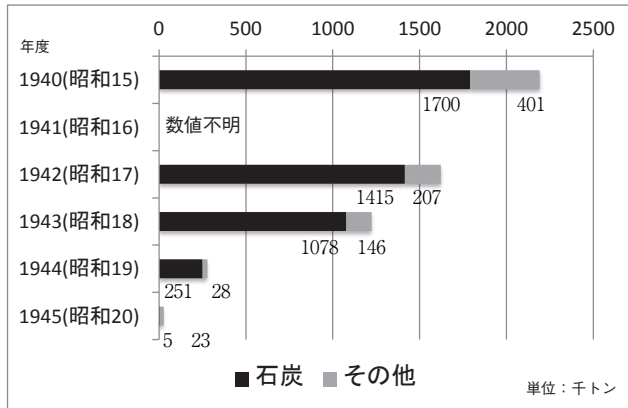


図1 釧路港輸移出量⁽⁶⁾

之を他の輸送力の裏付ある地方の炭鉱に転換せしめ戦力化し得るべき石炭の増産を促進し現下の急迫せる石炭需給状況を打開し以て決戦遂行に必要な戦力増強の緊急要請に応えんとするに依る」としている。ただし、樺太は島内工場向け石炭を生産する炭鉱は保・休坑にはならず、また釧路炭田での保坑は、道東地域の産業・暖房炭として一定の生産を行なっていた⁽⁵⁾。

三、「急速転換」の実施

釧路地区では、尺別・浦幌・本岐・太平洋別保・雄別（主として苔樋区域を除く）が休坑、太平洋春採・雄別（主として苔樋区域）・庶路が保坑に指定され、「内地勤労者」が三〇〇〇名（うち一〇〇〇名は努力目標）、「半島労務者」三〇〇〇名の計六〇〇〇名を転換対象とした。

「樺太及び釧路地区炭鉱勤労者、資材等の急速転換実施要綱」には、詳細に転換計画が記されている。以下に、「要綱」の本文を示し（一部略）、釧路の対象各炭鉱から九州への転換計画を表2・3に示す。

樺太及釧路に於ける炭鉱勤労者、資材等の急速転換実施要綱
第一、炭鉱の整理は左の区分に依る

- (一) 廃止炭鉱 政府に於て其の鉱業権、設備及資材に一切を買収し事業を廃止せしむるものとす
- (二) 休止炭鉱 政府に於て其の鉱業権を除き転換付能なる設備及び資材一切を買収すると共に所要の補償を行い事業を休止せしむるものとす
- (三) 保坑炭鉱 政府に於て所要の補償を行い最小限度の保坑を行

わしむるものとす

(四) 維持炭砒 現状通り事業を継続せしむるものとす

第二、炭砒整理に依る勤労者(事務及技術職員を含む)の転出は原則として左記に依る

(一) 廃止炭砒に於ては女子を除くの外全員とす

(二) 休止炭砒に於ては女子を除くの外全員とす

(三) 保坑炭砒に於ては保坑要員として概ね一割乃至二割を残留せしむるの外全員とす

第三、整理炭砒は左の通りとす

(一) 廃止炭砒 (イ) 樺太 上塔路 白鳥沢 諸津 三福

名好 豊畑 興南

(ロ) 釧路 白糠

(二) 休止炭砒 (イ) 樺太 千諸 北小澤 小窓内 安別

(ロ) 釧路 尺別 浦幌 本岐 別保 雄別(主として苔樋区域を除く)

(三) 保坑炭砒 (イ) 樺太 塔路 大平 西柵丹

(ロ) 釧路 春採 雄別(主として苔樋区域)

庶路

(四) 維持炭砒 樺太に在りては廃止、休止、保坑炭砒を除くの外全炭砒

第四 整理炭砒による勤労者転換は概ね左の通りとす

(一) 樺太(内訳省略) 合計 九、〇〇〇名

(二) 釧路

(イ) 内地勤労者 三、〇〇〇名(内一、〇〇〇名は努力目標)

(ロ) 半島労務者

三、〇〇〇名

合計

六、〇〇〇名

第五 整理炭砒による転出者の転換先左表の通策定す(省略)

(備考)

第六 転出勤労者には転出に際し到着後直ちに作業を写し得る如く左記物件を携行せしむ

(一) 寝具、日曜身廻品、作業衣、地下足袋、シヨベル、スコップ、坑内帽、キヤツプランプ、同電池一式、ピック又はチャツクハンマー 搔板(カツチャ) ガス検定器、其他従来各自使用せる日常作業用具等

(二) 常面の出炭上緊急を要するものと認むる資材にして携行可能なるもの

第七 転出勤労者の輸送経路は別途之を定む

第八 転出者の給与等に関しては昭和十八年六月一日閣定「企業整備に伴ふ従業員措置要綱」に依り之を処理するを原則とす

第十二 整理炭砒に関連する家族移転、設備資材の転用に関しては勤労者の転換完了後別途調査の上計画を定め実施するものとす

(原則としてカタカナはひらがな・現代かなづかいに、漢字は当用漢字に置換した)

表2 「急速転換」による労働者の移動（釧路関係分のみ）

〔転換前〕						〔転換先〕				会社名
会社名	炭鉱名		労務者数	転出数	うち 半島人*	受入炭鉱	受入数	うち 半島人*	受入後 人員	
太平洋炭鉱	春採	保坑	2,278	1,290	470	三池	1,290	470	22,155	三井鉱山
	別保	休坑	1,331	970	350	田川（福岡県）	970	350	12,625	
雄別炭鉱鉄道	雄別	保坑 * 苔樋区域 以外休坑	2,204	1,500	890	鯉田	200	200	4,325	三菱鉱業
						上山田	200	200	3,348	
						飯塚	900	290	4,623	
						勝田	200	200	2,518	
	尺別	休坑	1,047	780	410	新入	780	410	4,049	
	浦幌	休坑	905	690	430	方城	690	430	4,418	
明治鉱業	庶路	保坑	819	530	320	赤池	530	320	5,366	明治鉱業
	本岐	休坑	204	120	30	豊国	120	30	1,816	
東亜鉱工	白糠	廃止	276	180	0	田川（山形県）	180	0	1,986	東亜鉱工
計			9,064	6,060	2,900		6,060	2,900		

「樺太釧路整理炭礦勤労者転出先調」⁽⁷⁾をもとに作成

* 当時の時代背景を示すため、「半島人」という表現はそのままとした

表3 「急速転換」による労働者輸送計画（釧路関係分のみ）

出発日時	発駅	転出炭鉱	転出労働者		計	受入炭鉱	乗車人員	着駅	到着日時	
			内地	朝鮮						
8月25日 17時30分	釧路	別保 春採		350 470	350 470	三井田川 三池	820	折尾 大牟田	8月30日9時15分 8月30日13時20分	
8月27日 17時30分	釧路	雄別 雄別 雄別 雄別		200 200 290 200	200 200 290 200	鯉田 上山田 飯塚 勝田	890	折尾690人 直方200人	9月1日9時15分 9月1日10時05分	
8月31日 17時30分		尺別 浦幌 係員		410 430 50	410 430 50	新入 方城	890	直方	9月5日10時05分	
9月2日 17時30分	釧路	庶路 別保 係員	430 100	320	320 430 100	赤池 三井田川	850	直方	9月7日10時05分	
9月6日 17時30分	釧路	春採	820 50		820 50	三池	870	大牟田	9月11日13時20分	
9月8日 17時30分	釧路	雄別 尺別 浦幌 係員	610 100 100 50		610 100 100 50	飯塚 新入 方城	860	直方	9月13日10時05分	
9月12日 17時30分		庶路 本岐 浦幌 尺別 係員	210 90 160 270 100	30	210 120 160 270 100	赤池 豊国 方城 新入	860	直方	9月17日10時05分	
9月14日 17時30分	釧路	白糠 別保 係員	180 170 150		180 170 150	山形田川 三井田川	230 270	五十川	9月16日18時52分 22時19分 9月18日16時59分 21時45分	係員30人共230名 係員100人共270名
合計			3560	3000			6560			予定人員6060人の所 500人増加せるは係員 を見込みたる為なり

「勤労者輸送計画」⁽⁷⁾「北海道発内地（九州向）行転属労働者輸送決定書」「樺太発内地転属労働者輸送決定書（新潟上陸）及釧路発一部」をもとに作成

四、「急速転換」経験者の証言

以下、「急速転換」経験者への聞き取り調査の内容を示す。まとめは筆者の責任で行った。【一】内は筆者による注記である。

(特記無しは現在、釧路市内在住)

佐々木 辰治 (一九二八年生・太平洋炭砒別保坑↓三井鉱山田川鉱業所)

太平洋炭砒別保坑に採用され、社内養成所を卒業の後、修理工場の鍛冶工をしていた。一九四四(昭和一九)年八月、一七歳で父栄吉(当時五〇歳)と兄栄作(当時二三歳)とともに九州の三井田川鉱に派遣された。出発当日は、選炭工場前の停車場から母親や弟妹、それに多くの転換者家族の見送りがあった。母親は見送り後、泣いていたそうである。普段は気の強い、人前では決して弱みを見せたことない母親であったが、夫と二人の息子との別れはさすがに堪えがたかったであろう。

青函連絡船で青森へ、青森駅では思いがけず多くの婦人たちの歓迎をうけた。リングをたくさん渡された。まるで出征兵士の見送りのようであった。このリングは九州で梨と交換し、大変喜ばれた。

約一週間の移動を終え、田川に到着した。仕事が始まると思うと、武者震いのような感動を覚えた。持参した寝具や身回り品を持ち、単身者用の「松原寮」(会社で一番大きな寮で約二〇〇人収容)に落ち着いた。

職場は未成年者であったこともあり、別保坑と同様に鍛冶工であった。私は常一番方勤務で、朝七時から夕方五時までの一〇時間勤務であった。夜八時頃までの勤務が続いた。仕事はきつと感じたことはあまりなかったが、弁当の中味は混ぜご飯、コウリヤン、米のないときもあった。

た。また、気候が釧路とは全く異なり熱射病で倒れる者もあり、私もその一人であった。作業衣は半袖半ズボンで、猛暑には閉口した。寮では縁側で、褥一本で寝ていた。

休日には、映画や近くの山に行きハイキングを楽しんだ。北海道ではできない果物狩りが一番楽しかった。台風一過の晩秋、寮の真下の農家で落ちたクリを拾っていたら大声で怒鳴られ、竹の棒で追われた。九州弁なので、採ってはだめなのだと分かるまでしばらくかかった。結局、お金を払い許してもらった。当時のお金でたったの一円で、その後は大変な「お得意さん」となった。春には仲良くなった田川での友人に案内され、タケノコ採りに行った。釧路から送られた鮭を職場の仲間に渡すと、北海道の人は贅沢だと羨ましがられた。

仕事は、一八歳になるころにはエンドレスの保守作業に変わった。三坑の坑内でも作業したが大変な暑さであった。職場では朝鮮人、中国人、オーストラリア人の俘虜と一緒にあったこともあった。食糧事情は悪く、俘虜に私の弁当をお裾分けしたこともあった。

終戦後、労務担当者は労働強化の責任を恐れ雲隠れしてしまった。やむなく「一刻も早く郷里に帰りたい」と仲間と勝手に切符を手配した。兄は途中で樺太に出征しており、私と父は復員軍人で満員の貨車に乗り込んだ。

佐藤 友信 (一九二八年生・太平洋炭砒春採坑↓三井鉱山三池鉱業所三川鉱)

一九四四(昭和一九)年八月中旬、鉱業所長から事務社員全員に招集が掛けられた。「太平洋炭砒春採坑は保坑とし、五〇〇名の保安要員を

残し全員九州の三井鉱山に転換する。出発日程、詳細は後日連絡する」
との訓辞があった。

当時私は、鉱業所経理課資材係に事務員として勤務していた。八月一日【?】、各職種別に班編成された列車に乗り、春採駅を午後六時に出発した。まだ一七歳であり、未知への憧れと楽しみ、見知らぬ土地での生活の不安とで複雑な心境であった。

列車は、各駅停車で一週間後の八月二十五日【?】正午、大牟田駅に到着した。途中の食事は、三食とも弁当が支給され、夜は二人掛けの椅子席に一人、その下に隣席のもう一人が新聞紙を敷いて寝た。また軍需工場地帯の見える場所ではカーテンが下ろされ、景色は見られず、快適な旅行とは言えなかった。

到着後、体育館に集合し、勤務職種毎に分けられ入居先や作業内容などの説明を受けた。二〇歳未満の者は小浜町の「青年塾」に入寮となった。翌日、三川鉱の林所長の歓迎挨拶を受けた後、各人の職場が決定された。事務職は全員、坑内技術、作業手順など習得のための技能訓練を技術員養成所で受けることとなった（写真1）。二ヶ月にわたる訓練は緊張の連続で、現実の厳しさに戸惑った。

一〇月下旬、坑内軌道員として正式に配属された。ここで太平洋炭硯春採坑での上司である近野、藤好の両係員に会い、懐かしさがこみ上げてきた。作業衣は半袖、半ズボン、地下足袋、帽子は布製で安全灯を装着する前頭部に竹筒が使われていた。竹筒装着の保安帽は釧路にはなく、九州では豊富にある竹を有効活用する工夫がされていると感心した。弁当箱は青年塾で用意した木製の統一したものであった。坑内現場は高温で作業は大変だった。現地ではあまり好まれない湧水の多い現場も、釧

路から転換された者にはシャワーを浴びるような心地よさがあり、逆に喜ばれていた。

坑内軌道員在籍のまま二週間に一度、午前八時から午後四時までの八時間、青年学校に通った。訓練と学科、特に学科では修身と規律が厳しくおこなわれた。学校長は退役軍人の少将であったように記憶している。仕事と勉学の毎日であったが、楽しみは公休日と同室の仲間と会社の劇場で映画や浪曲を聴きに行くことであった。

一月上旬のある日【十一月十五日?】、坑内で昼食中、近野係員から「大牟田市内が空襲でどこかの寮がやられたらしい」との連絡を受けた。昇坑後、まさかと思ったが、私の住む青年塾と第五大和寮が罹災していた。大和寮では長堀氏の父が亡くなったと知らされる。最初の太平洋炭硯出身の犠牲者だった。

一九四五年に入ると毎月、上旬・中旬・下旬と三回に分け特別生産日が設定され、会社一丸、休憩時間も短縮され増産に励んだ。昇坑すると国防婦人会の奥さん方の慰問があり、収穫時期にはミカンが大スコップで二杯、時により特大の豆パン二個など、いつも空腹の身には大変有り難かった。

その後、連日の空襲警報で夜中に起こされ防空壕を出たり入ったり、また捕虜収容所の監視を命じられたり大変な状況になってきた。石炭を掘るのも国のためだが、しかし兵隊として戦場に行くのはもつと国に役立つものと考えerようになった。せつかく兵隊になるなら兄が戦死した海軍志願兵が良いと応募した。

待機中の八月一日、三川鉱の総務課長より青年塾に、「全員正午広場に集合するように」との電話があった。玉音放送を聞き、「まさか」

と涙する者、「ああこれで釧路に帰れる」とほっとする者、広場は騒然となった。私は兵隊に志願、待機中であり、一体どうなるのか、と呆然自失であった。

翌一六日、太平洋炭砒からの転換者が全員、三川鉾の集会所に集められ、林所長からこれまでの勤務と労苦にたいしての感謝の謝辞があり、帰路についての具体的行程が決められた。青年塾では、寮長と各班長が相談し、切符は三〇人単位の団体乗車券、外食券は一人七枚、大豆炒豆約八合支給、七・八月分給料支給、預金通帳など個人名義の書類は返還受領、の取り決めにより八月二五日に釧路に向け出発となった。偶然にも出発日は、昨年、大牟田駅に到着した日であった。列車はすし詰め状態で、私は団体乗車券の管理を任されていたため、各駅での人員確認や次の列車の手配に苦労した。ある時には点呼で一人足りず捜しているうちに予定の列車に乗り遅れ、やむを得ず無蓋車の連なる石炭列車に乗ったこともあった。大牟田駅を出発してから八日後の九月二日、一年振りに釧路に帰還した。全員無事釧路に帰ることができ、班長の責任を果たせたこと、九州での一年間の貴重な体験は、その後の私の人生に大いにプラスになった。

布施 光男（一九二七年生・太平洋炭砒春採坑↓三井鉾山三池鉾業所三川鉾）

一九四二（昭和一七）年に一四歳で太平洋炭砒に採用になり、二年間の技能者養成所入所を経て、一九四四年春より坑内測量係として勤務していた。

同年夏、九州転換の第一陣として臨時列車で春採駅を出発した。列車

は何力所かで待機を繰り返しながら目的地の大牟田駅に一週間後に到着した。途中、品川駅では本社社員の激励を受けた。到着後、直ちに用意された第五大和寮に入居した。大和寮は第一から第八まであったと記憶している。

職種は、「一七歳で重労働の経験もなく、しかも五〇kgそこそこの貧弱な身体では無理だ、一緒に測量の仕事しよう」という先輩の説得を振り切り、「この手で直接一塊でも多くの石炭を掘り出して国のために尽くしたい」の一念で、九月中旬から採炭夫として働きはじめた。ロング作業、特に小切羽での二m炭車四函を手積のノルマはきつかった。

坑内の温度は高く、このため作業衣は上半身裸かランニングシャツ一枚、下は脚絆に丁字褌姿、それに地下足袋であった。

先輩達から「三ヶ月近くも満勤を続けているがムリするな、少し休養せよ」のアドバイスを受け、労働担当者に申し入れたが、「今は戦争中で、国のため一人でも多く頑張つて欲しい」と逆に説得された。

一二月月上旬、三番方勤務時にロングでチェンコンベヤーが止まり、運転再開を待っていたところ、二m位の高さから落石（大きさは三五cm×二五cm×二五cmほど）があり、頭部を直撃した。一瞬気を失ったが、「血が止まれば助かるかも知れないぞ」という声に我に返り、なにげなく顔をなでた手に、大量の血がついた。「ああ、怪我したんだ」と、不思議な感じであった。担架で搬出され、三川鉾医院で応急処置を施し、三池炭鉾病院で手術を受けた。額左側から後頭部にかけて一七cmの裂傷、親指の先が入るほどの頭蓋骨折陥没の重傷だった。炭鉾病院には一八日間入院し、手術後の経過も良く、運良く最高の医療技術で助けられたと感じた。

一九四五年になり、通院治療・体力回復のため約一ヶ月間休養してから坑外軌道係として復職した。傷害補償の診断は二級だったが、終戦後の混乱もあり特に補償されなかった。

三月から終戦の八月までは、三交代で坑内ガス検定係の仕事をした。春採坑から一緒に測量係の先輩三人は、到着直後の九月に一人、また翌年一月に二人と、全て兵役のため釧路に帰っていった。いろいろ助言してくれた先輩もおらず、しばらくの間は随分寂しい思いをした。

春頃から会社の方針で、二〇歳以下の者は「青年塾」（独身寮）に転居した。同年代の若者同士、故郷を思い出しながらも賑やかであった。青年塾は比較的新しい社宅の内部を改造したもので、一室に五、六人の共同生活でしたが特に不自由を感じたことはなかった。しかし、毎日のように空襲、焼夷弾が投下されるようになると恐怖の夜を過ごすようになった。

終戦後の八月下旬、帰路の列車に乗ることができた。釧路を出発した時とは随分人数が減っていた。一九歳以上は徴兵検査を受け、続々と出征していたことに気付いた。

中川 義雄（一九二九年生・太平洋炭硯春採坑→三井鉱山三池鉱業所三

川 鉱）

父親は太平洋炭硯にいたが、辞めて戦争前に商売を始めた。私は二人兄弟の五番目として生まれた。

一九四三（昭和一八）年、高等小学校卒業後、一四歳で太平洋炭硯に養成工として入社した。兄も太平洋炭硯に入っており、電気の仕事をしている。一九四四年四月に選炭工場に配属となった。当時は手選で、女

性の多い職場であった。粉炭は機械で選炭した。

同年九月、三池炭硯へ転換されることとなった。九月四日に発ち、一日に着いたと記憶している。兄は残留している。春採駅に本線の汽車が入ってきて、何百人も乗車した。夕方に出発、駅まで家族が見送りにきてくれたが、寂しい気持ちもあった。持ち物は布団、着替え、生活道具のみで、仕事に関係するものは持参しなかった。私たちは転換第二陣で、日本人のみだった。列車は駅には止まらず山の中で止まった。東北地方では果物、特にブドウ・リンゴの差し入れがあった。釧路、青森、大阪、関門トンネルを経由した。軍需工場地域通過時は、窓は戸を下ろさせられた。大牟田は建物が多く、駅前には大きな病院や工場が見えた。建物がみな大きいのが印象的であった。

三川 鉱に配属され、第五大和寮に入った。寮は釧路から来た者ばかりで、食事は米がいくら入ったダンゴ汁、大豆カス、コーリヤンなどだった。汁物は「海水汁」で、青ノリ、豆腐が少し入っていた。

仕事時の服装は、布製の帽子に、薄いシャツ、暑いところではフンドシ一丁、足はきやはんに地下足袋、終戦近くはわらじになった。すぐ痛むので、中古ベルトコンベアのゴムでサンダルを作って履いた。

一月に大分県の浮羽にある鉱員練成所へ行き、その一週間後には青年塾へ入った。空襲警報が出ると俘虜収容所へ竹槍をもって急行し、監視した。俘虜収容所にはオランダ・イギリス・アメリカ人二〇〇〇人があった。毎日一、二人が死亡し、火葬場へ運ばれていた。食事も少なかったようで、ミカンの皮を捨てると、俘虜は拾って食べていた。九月に宮浦―三川鉱連絡坑道で坑内火災があったが、中国人がまだ五三人も坑内にいるにもかかわらず密閉してしまった。この日は、釧路から三池に到

着したばかりで休日だったが、「早く働け」ということで、初めて入坑したその日であった。

職場は三川坑本卸の、真ん中あたりの上層の採炭現場が中心であった。番割は太平洋からの人がほとんどで組となり、甲・乙・丙方の三方があった。同じ仕事には朝鮮人はいなかった。もともと三池にいた人よりも、太平洋炭砒からの者のほうが積極的に働いた。しかし、設備は三池のほうがずっと良かった。三池では空襲警報が発令されると、坑内のポンプを止めてしまう。石炭を一トン掘るのに八トンの水が出ると言われ、坑道はすぐ水没してしまうため、水がひくまで退避しなくてはならない。給料は良かった。月二〇円、うち一〇円を送金し、五円貯金、五円小遣いとしていた。物がなく、小遣いで坑口近くにあったお菓子屋でサツマイモを使った菓子を買った。休日にはブドウ、梨、ミカンなど果物を買いに銀水まで出かけた。

青年塾が空襲に遭った日は、酒が多く配給され、皆酔っ払っていた。自室で寝ていたところ、すごい音がしたので飛び起きたところ、布団が燃えていた。あわてて外に出ても誰もなく、すぐ近くの海岸に皆避難していた。足に火傷を負い、今もその痕は残っている。何人も火傷を負い、太平洋炭砒からの転換者も三、四人、亡くなっている。東京からの徴用者も火傷をしていた。動けないので二、三日はリヤカーで運んでもらい、一週間か一〇日後に仕事に戻った。

終戦の少し前【八月七日か?】、空襲警報が出ていたが、いつも飛行機はやってこないで川の上流へ泳ぎに行った。しかし、その日は飛行機がやってきた。逃げるところがなく、一本の木にみんな隠れた。近くに高射砲陣地があり、五機のうち一機に命中、空中分解した。そのB 24

には八人か九人乗っていた。憲兵隊がやってきて大騒ぎになった。死んだ米兵は首に縄をつけられ、近所の人が田圃の中を引きずり運ばれた。八月九日には、長崎の方向に薄いピンクの光を見た。

八月十四日、「明日は俘虜を全員入坑させない」との指示があり、一五日は採炭も仕事はせず、電話番号として入坑した。一五日以降は商店が襲われるなどの暴動もあった。火薬庫が占領され、軍も鉄砲を盗まれていた。治安維持のため憲兵隊が入ってきた。俘虜のために、物資が空から投下され、中にはタバコ、ガム、チョコなどが入っていた。

九月中頃、一〇日前後だったか釧路へ戻ることとなった。団体乗車券で、二、三歳年上の木村班長のもと、一〇人組で帰路へついた。まず広島まで向かったが、夜中になって列車はストップするなど混乱していた。広島では、駅近くにあった破裂した水道管から水があふれていたが、憲兵隊が「水を飲むな」と注意をしていた。ちょうど北海道行きの復員列車があったので五人が乗車、私を含む残りは石炭輸送列車の貨車の上で姫路まで行った。兵隊も何人か乗っていた。姫路から電車で大阪へ、大阪駅で復員列車に乗った五人と再び一緒に、日本海周りで青森へ向かった。

青森では五、六時間待たされたあと、鉄道連絡船ではなく三千トンくらいの貨物船に乗り、途中米軍の航空母艦二隻ほか七隻に追われ、貨物船は民間船であることを示すため旗を上げたり下ろしたりと、時間がかった。函館到着後、東釧路まで列車に乗り、そこから歩いて自宅へ帰宅した。一年の間に妹が一人増えていた。二ヶ月仕事に出ず、一九四五年一二月に新たに採用となった。労働組合は「判をもってくれば年功継続する」と言ってくれたものの、実際はなっていなかった。

九州での一年は、ただ忙しいだけであった。

岡田利春（一九二五年生・太平洋炭硯春採坑→三井鉾山三池鉾業所宮

浦鉾・職員）

一九四二（昭和一七）年二月、太平洋炭硯入社、六ヶ月の実習後、採炭現場係員となった。

一九四四年当時、ヤマでは輸送がマヒして貯炭の山が急激に増えていた。八月には三池への転換命令があった。私は一家の担い手であり、来年は入隊しなければならないという事情を話して、残してくれるよう申し込んだが、坑長は「君のような元気な者こそ進んで頑張ってもらいたい」と言われた。私にとってはショックではあったが、いずれ入隊する身であり、見たこともない南国への好奇心もあって、第一陣で出発することにした。

第一陣の出発は八月下旬【八月二五日？】の快晴の日であった。第一陣の中隊長は続光雄区長で、私は朝鮮人六五人引率の小隊長を命じられた。春採駅に引き込まれた特別列車の前で、所長の送別の言葉も上の空で聞いていた。その時の私の服装は、詰め襟に戦闘帽、巻ゲートルであった。全山の人達が転換者を取り囲み、別れを惜しむ姿は出征兵士を見送る光景と同じであった。私は両親と四人の弟妹に囲まれ、母の弁当をリュックサックに詰め出発した。

第一陣は朝鮮人労働者中心の列車だったため、車中は小隊長のほか労働係が二人位おり、両方の出入口は逃亡を防ぐため引率者で固めていた。朝鮮人労働者達は、祖国が近くなると喜び、ささやきなら逃げる相談などしている様子が窺えた。特に大阪を過ぎる頃は雰囲気違った。関西

地域は在日朝鮮人が多く住んでおり、何となく故郷の近くなるを感じ取っていたようだった。関門トンネルは完成したばかりだったが通過、無事大牟田駅に到着した。私は事故なく全員無事送り届けたことで全身から力が抜け、疲れがどっと襲ってきた思いだった。

先輩の渥美、川合、高橋氏らと一緒に宮浦鉾に配属、宿舎は当初、坑口から徒歩三〇分、勝立の青年寮だった。宮浦鉾には、朝鮮人労働者はおらず、中国人・オーストラリア人などの捕虜労働者がいた。現場は残柱式で甲、乙、丙（三交代）に太平洋の係員がそれぞれ配置された。中国人四〜五人にもともの三池の鉾員が数人の編成で働いた。捕虜の中国人の昼食弁当はマントウ（万頭）で、大豆や雑穀まじりの粗末なものだった。私は純粹の「炭山っ子」だったので大抵の仕事はこなせ、よく中国人を手助けした。言葉は分からないが、単純業務のため不自由はなかった。坑内温度は三〇℃を超える暑さで、係員は半ズボンに半袖、鉾員は禪一本に脚絆だった。勤務時間は八時間の現場交代、入坑から昇坑までの拘束時間は一〇時間だった。太平洋炭硯での連勤と比べると勤務時間が短く、肉体的にはかなり楽であった。

休日には先輩職員の川合さん家族と、万田坑近くの梨山や周辺の農家に買い出しに良く出かけた。手取り六五円の給料は留守宅に六〇円を送金した。残り五円と出炭競争の賞金一〇円の一五円は酒もタバコもやらない私には十分で、結構好きな本も買えた。

その後、一九四五年二月一日付で旭川入隊となった。慌ただしいう出発であったが徳富蘆花の子息である徳富鉾長主催の送別会と、襟に毛皮の防寒衣を受け、わずか五ヶ月の宮浦鉾を後にした。入営の列車内には北海道の炭鉾へ徴用された朝鮮人労働者が乗っており、引率者として釧路

工業高校時代の同級生で太平洋炭砒から三井砂川鉱に転換になった小松公明君と先輩の逸見千太郎氏がいた。

終戦後、釧路に復員し、職員としての籍が三井三池炭鉱にあったので、太平洋炭砒の人見勇氣所長に家庭の事情を話し、職員でなくともよいから勤務できるように要請した。しかし「君は三井の社員であるから鉱員としては採用できない、三池炭鉱へ行け」と断られ、やむなく三池炭鉱に行くこととした。三池炭鉱への出発は一〇月中旬、酔を入れたおにぎり五日分、それに一升の大豆を持参し、戦後の混乱の極限にある日本列島を縦断する旅に出た。列車は満員どころか鈴なりの状態だった。東京の凄まじい空襲の焼け野原、大阪では腐敗しはじめたため捨てたおにぎりに浮浪児がむしゃぶりつき、広島島の原爆投下の惨状を目の当たりにした。大牟田まで八日間かかったこの旅は、生涯忘れ得ぬ強い印象となっている。その後、一九四六年一月に太平洋炭砒に復職することができた。

長内 竹夫（一九一九年生・太平洋炭砒春採坑↓三井鉱山三池炭業所四山鉱・職員）

太平洋炭砒には一九三七（昭和一二）年三月に入社した。一九四四年当時は二五歳、係員であった。坑長から「出炭しても工場に送れないので工場に近い炭鉱に行ってもらいたい、派遣先は九州の三井三池炭鉱」と言われた。当時は戦争中であり命令は絶対的なものであった。すでに結婚し子どもが誕生したばかりであったので、単身赴任となった。

八月下旬、臨港鉄道の春採駅を特別手配の列車で家族と多くの仲間に見送られ、午後五時三〇分出発した。私は派遣第一陣で朝鮮人労働者の小隊引率責任者であった。列車は朝鮮人労働者が中心で五輛〜六輛、一

輛に六五人程度が乗っていた。朝鮮人労働者の引率は神経を使った。特に停車駅では逃亡されないよう、同乗の労務係の人と監視を怠らなかった。ある班では逃亡者が出て憲兵の出動騒ぎもあり、捕まったら銃殺かと話していた。列車内の食事は弁当で結構良いものであった。予定通り一週間後の九月五日【？】、大牟田に到着した。

私は仲間の若生・藤井氏らと四山鉱に配属になり、民家を改造した社宅に入居した。仕事は沿層掘進、朝鮮人労働者と中国人捕虜中心の五〜七人と数人の日本人鉱員、日本人係員（樺太からの転換者もあり）が一人のチームで、その五〜六チームの主任係員であった。朝鮮人や捕虜とは言葉は通じなかったが、単純作業のため問題はなかった。しかし、九州弁が理解できず苦労した。

現場は太平洋炭砒と良く似ていた。炭丈は少々高いものの、傾斜は少なく、原料炭とあつて炭壁はやわらかくツルハシで採掘でき、発破はほとんど必要なかった。技術的にはひいき目で見ても太平洋炭砒が一枚上手と感じた。給料は太平洋炭砒と同額の月給一〇〇円くらいだったと記憶している。当時の四山鉱鉱長は芹田栄次氏で、同氏は昭和二三年に太平洋炭砒釧路炭業所長として赴任している。

一二月、突然、鉱長から「仕事が長くなるから職員は家族を呼び寄せろ」と命令があった。当時職員の派遣は転勤扱いであり、さっそく私と職員の何人かで、釧路まで家族を迎えに行った。この頃、釧路に残っていた妻から「転勤職員の家族は社宅を出なさい、と言われている。どうしたらよいのか？」との手紙をもらっていた。

派遣家族の列車は一両五〇〜六〇人乗車し、五〜六輛編成だった。列車内は大変な賑わいであった。幼児を含む大勢の家族は慣れない列車で

気苦労も多く、車内はオシメなど洗濯物がたくさん干された。洗濯の水は各駅停車時にもらい、ミルクを沸かすのも蒸気機関車からコップ一杯の湯と持参の米一合と交換するなど、大変な移動であった。

社宅は現地で一棟二戸建であった。家族は慣れない気候に悩まされ、一九四五年七月、一歳だった長男が発病、亡くなった。

私達の現場で働いていた朝鮮人は、一九四四年十二月に「帰りたい」と会社申し入れて朝鮮半島に帰っていた。戦争激化の中、一人でも多くの労働者が欲しいこの時期、何のトラブルもなく帰国できたのを不思議に思っていた。朝鮮人にも「契約（二年）」と「徴用」の二つの形態があり、帰った朝鮮人は前者の「契約労働者」だったのかと後に考えた。

年が明けると、毎日のように空襲警報が発令された。社宅の屋根は延焼を防ぐため瓦だけのものではあった。ある夜、焼夷弾が天井を突き破り部屋の中に落下した。その時は夢中で燃える焼夷弾を手づかみで外に放り投げた。焼夷弾は「モロトフのパン簞」と言われた親子焼夷弾で、途中から比較的小さな爆弾に分散されるバナナ位の小さなものだった。空襲の翌日には、大工が被害を受けた社宅を回り修復を行っていた。

八月一五日、敗戦を聞いても不思議なくらい、何の感慨も湧かなかった。毎晩の灯火管制で裸電球の笠を覆っていた暗幕を今日からしなくとも良いと、やれやれと思った程度であった。

街中では中国人捕虜が暴れ回っていた。オーストラリア人やほかの捕虜はおとなしく暴れることはなかった。また朝鮮人はこのころはあまり残っていなかった。

終戦で鉾員は続々と釧路に帰って行ったが、四山鉾の職員は転勤者であり引き続き働いていた。人手不足のため係員自ら採炭に従事した。も

とからの三池鉾業所の鉾員・係員も復員し、現場の状況も良くなり落ち着いてくると、釧路を思い出すようになった。家族は早く釧路に帰りたい、の一念であった。途中、父の危篤を知らせる電報で釧路へ戻ったこともあったが、会社からは釧路への復職許可は出ず、やむをえず一九四六年十二月、家財をまとめ逃げるように四山鉾を發った。切符の手配に大変な苦勞をした。

釧路に戻ったあとは、父の営む鮮魚店を手伝いながら太平洋炭砒への再雇用を待った。一九四七年二月、四山鉾での勤続も通算の上、職員として継続雇用となった。

清藤昭治（一九二五年生・太平洋炭砒春採坑↓三井鉾山三池鉾業所）

一九四四（昭和一九）年、太平洋炭砒の養成所を卒業し坑外電気係に配属されたが、八月、三井三池鉾業所電気課旭作業所に派遣となった（二八歳）。旭作業所は、外線、内線、電話一般の三部門に分かれており、私は他の同僚七名と外線関係を担当した。強電関係で発電所、変電所、外線工事の新設保守で、主に三井企業系列の各坑務所、軍需工場などの大きな電気工事に従事した。重労働であり、同僚のうち、半年間に二名がもつともな理由をつけ釧路に帰り、また二名は兵役に、他の者も内線業務に替わった。当初、気候風土に馴染めず、言葉が通じない、食べ物も北海道と異なり馴れるまで大変苦勞した。

一九四五年四月二〇日、三井鉾山系列の阿蘇鉄鉾石採掘場に所員四名と出張を命じられた。宿舎は内牧温泉近くの農家で、食べ物豊富であった。作業の疲れもこの温泉で癒すことができた。作業の帰り、畑から美しい女性の歌声が聞こえた。聞き慣れない歌なので足を止め声を掛ける

と、沖縄からの集団疎開で農作業をしており、歌は沖縄の民謡であった。出張最後の日には、阿蘇山火口まで登山した。

六月の沖縄戦終結後、九州各地は毎日のように空襲があった。七月二日、三池港近くの軍需工場で昼食後の休憩中、空襲のサイレンが鳴り屋外に飛び出した。米軍機の低空からの機銃掃射により、一人の女子学生が即死した。私も危険を感じ、とっさに近くの水田に無我夢中で飛び込んだ。敵機が去り泥田からはい上がった自分の姿に、悲しいやら悔しいやら複雑な思いで涙が出た。

八月七日夜、大牟田は上空襲で焦土となった。私の住む寮も全焼した。その後は会社が用意した大きな農家の一室で暮らすこととなった。八月九日、四山鉾に行く途中、見晴らしの良い高台で島原半島方向に大きな黒煙を見た。煙はみるみるうちに高くなり、傘の形から巨大な雲に変わった。後日、米軍機からの宣伝ビラで、長崎に投下した「特殊爆弾」とわかった。

八月一日、外線改修工事で三池製作所を訪れたが、工場内は空襲で散々に破壊されていた。残骸の後始末に従事していたのは、アメリカ兵・オーストラリア兵捕虜であった。昼食の弁当を開いていると、アメリカ兵捕虜に「包みの新聞紙を見せて欲しい」と日本語で話され、驚いた。監視が厳しいので、読んだらすぐ返すように言い、渡した。物陰で読み終わったアメリカ兵は一言「日本は戦争に負けるよ」と言った。空襲の状況などから、日本の敗戦が近いのを感じ取っていたのだろうか。

八月一日に玉音放送を聞き、「これで三年八ヶ月に及んだ戦争が終わった、鉦路に帰れる」と思わずほっとした。次の日からは帰る仕度に専念した。会社に給料と退職金をお願いし、これを旅費に充てた。会社

では軍隊から大量の放出物資があり、受け取りに来るよう連絡があったが、終戦で同僚も去り、仕事も手に付かず空虚な気持ちであり、とてもその気になれなかった。

八月二一日午前六時、大牟田駅から列車に乗車、激しい空襲、過酷な労働に良く耐えたものと、感慨無量であった。列車内は復員軍人、引揚者ですし詰め状態であった。途中、広島駅では市内を一望できたが、原爆投下で全てが破壊されており、改めて原爆の恐ろしさを実感した。列車は太平洋側を通らず大阪駅から日本海側をまわり青森駅に到着。連絡船の待合所では、人びとは手にあまる大きな荷物を抱えていた。私は空襲で焼け出されたことから手荷物はひとつもなく、うらぶれた姿であった。船上から函館山が大きく見えはじめる頃、船内には歓喜の声が上がった。そして函館駅を出発し一日かけ、夜一〇時に鉦路駅に到着。家まで四kmを歩いた。予告なしの帰宅に家族は驚いていた。見知らぬ土地で方言がわからず困惑したこと、真夜中の空襲で丸裸で焼け出されたこと、遠くから長崎に投下された原子爆弾を見たことなどを明け方まで語った。

今井隆一（一九二八年生・太平洋炭砒春採坑↓三井鉾山三池鉄道）

一九三〇（昭和五）年、馬五頭と家族六人で厚岸の尾幌から現在の鉦路市興津に入植した。父の畜産業を手伝っていたが、少しでも家庭を助けたいと一九四四年に一五歳で太平洋炭砒に勤めることにした。職種は坑外運搬夫で、春採湖のスリ埋立作業を行った。勤務わずか三ヶ月後の八月に、三井三池炭砒に転換させられた。一五歳の鼻垂れ小僧、右も左も皆目分らない少年が強制的に未知の九州の炭砒へ転換されるわけ

で、一体どうなることかと不安であった。

臨港鉄道の春採駅を特別仕立ての列車で出発したのは夕闇迫る時間で、駅頭には大勢の家族、会社の皆が見送りに来ていた。中には「行きたくない」と見送りの母親に大声で泣き叫ぶ少年もいた。一五歳は、今では中学を出たばかりだから無理もない。

三池へは約一週間かかった。途中は戦時中のこともあり「外は一切見てはならない」と窓はカーテンを下ろしたまま、青函連絡船も上甲板には出してもらえず折角の景観も見られず、北海道との別れもできなかった。

年齢的に坑内作業ができないため、三池鉄道の機関助手になった。九州弁には戸惑った。幸い、同僚・先輩には樺太からの転換者とコンビにしてくれたので、地元の皆さんと違い、番号が合う【気心と言葉が合うの意】ので助かった。

仕事はきつくはなかったが、三交代で連勤が多くあまり休めなかった。給料は月給三〇円、先山でも一〇〇円くらいで、太平洋炭鉱では六〇円位もらっていたので安いのに驚いた。

私は三交代で日中も寮に居ることもあり、そこではひどい風景を何度も見た。出勤不良者が、寮長と警察官に殴る蹴るのヤキを入れられていた。非国民と怒鳴られ出勤を督促されていた。日本人でもこのような仕打ちを受けていたわけだから、中国人、朝鮮人、俘虜などは大変だったと思う。

転換当初、休日には近郊の野山のピクニック、史跡の見学など結構楽しみ、また青年学校の教練で汗を流した。しかし、翌年になると連日深夜に亘る空襲でそれどころではなく、日中は機銃掃射、夜は親子焼夷弾

の投下で町中火の海となり、全く生きた心地はしなかった。「なぜ日本の飛行機が応撃しないのか。どうなっているのか？」と不思議と不安にかられ、少年の心にも「もしかしたら日本は負けるのではないか」と思った。

この頃、空腹と連日の空襲に、樺太から来た若者たちと「逃げて北海道に帰ろうか？」と相談した。しかし「この辺の山には毒蛇やマムシも居るぞ」「ましては津軽海峡をどうして渡るんだ」「もう樺太には帰れないぞ」と真剣に話した。一六・一七歳の小僧の幼稚な考えでも、当時は真剣そのものであった。

三番方で寮に帰る途中、ちょうど時計の一時方向の長崎方面の上空に真赤なきの雲が上がった。「ああ、あれが原子爆弾か？」と思った。すでに広島に投下された大型爆弾が原子爆弾だとの噂が流れていた。

間もなく、上空からは爆弾でなくビラが投下されはじめた。今でも鮮明に記憶している。「原子爆弾一発はB29が二、〇〇〇機で投下する爆弾に匹敵する。もう日本は負けます。早く天皇陛下に申し入れ降伏しなさい」との文面であった。憲兵がうるさく、所有できなかった。

わずか一年間の三池炭鉱での生活であったが、若十一六歳の少年の人生経験としては大変過酷な思い出となっている。

釧路への出発は九月一日で、終戦の混乱の中でも会社は帰還者への対応はきちんとしてくれた。仲間三人と一緒に切符の手配がされ、食糧は米二升、大豆一升、それに給料は一〇〇円札二枚の二〇〇円をもらった。この時、私自身はわずか六〇円しか持っていなかった。また大豆はあらかじめ煎って持参、車中の食糧にした。

途中、広島駅での車中からの眺めは見るも無惨であった。街中、真っ

黒な焼け野原で、所々に工場や風呂屋の煙突らしき瓦礫が残っているだけであった。人っ子一人もない風景は異様であった。

列車はあえぎあえぎの運転で、青森駅で下ろされた。旅館に泊まることもできず、駅の構内で野宿した。リンゴを買って空腹を満たした。津軽海峡を渡り北海道の姿が見えたときは、思わず涙が出そうになった。函館で一泊、持参の米五合を旅館で炊いてもらい、久し振りに満腹、残りを握り飯にしてもらい釧路に向かった。

我が家に着いたのは夜の九時頃と記憶している。出発から約一年間の短い期間だが、私にとっては色々な経験を得た二年も三年もの長いような一年であった。

九州からの帰還後は、家業の畜産業と馬車での石炭運搬に従事したが、時代の変化は激しく、運搬業は馬車からトラックに変わった。私も再び、炭鉱会社に再就職した。

藤原芳夫（一九二四年生・明治鉱業庶路炭鉱→明治鉱業赤池炭鉱）

尋常小学校を出て、旧制釧路中学へ進んだ。一九四〇（昭和一五）年、五年生になって先生がしきりに進路を聞いてくるようになったのもあり、十一月頃から就職活動をした。浦見町の「うきよ」という飲み屋の跡を明治鉱業の営業所として使っていた。庶路では、チクタナイ沢の坑口からその年から出炭が始まっていた。一九四一年三月三日に卒業式、三月一五日、庶路炭鉱へ採用された。一級上に、事務をしている先輩がいた。

工業学校の採鉱科を出ればすぐに正職員になれたが、中学卒では一年間、臨時採用となっていた。寮に入り、まず測量室に配属され、二週間

は坑内の状況を把握が仕事だった。その後、坑内で現場監督をした。朝鮮人労働者とは言葉が通じにくく、制止したにもかかわらず炭車を動かされてしまい、私はルールと車輪の間に指を挟まれてしまった。そのケガの補償金は五〇円だった。頼んで、測量室へ配属転換した。明治鉱業は同年に本岐・上苫別炭鉱を買収したが、あまり良い炭鉱ではなかった。兵隊に行く人が多く、庶路だけでなく本岐も担当した。

九州への転換は、尺別炭鉱の第二陣と一緒に移動した。荷物は、服と布団一式のみ、炭鉱での道具は持たなかった。西庶路より列車に乗った。弁当を配給する担当をした。車端部に日本人が、中央に朝鮮人労働者が乗った。若い日本人は監視役をさせられた。朝鮮人は一歩も列車から出ることができなかった。労務係や朝鮮人飯場の寮長は、私たちとは別の車両に乗っていた。

夜一〇時頃出発し、尺別で尺別炭鉱と合流、車中泊。目が覚めたら、苦小牧だった。室蘭だったかで朝食の弁当を積み込んだ。巡查・警防団・在郷軍人会が逃亡防止のためか、駅で監視していた。函館に到着し、青函連絡船に乗る。青森で列車を降りて旅館に一泊し、翌朝、常磐線を経由して品川に到着した。同じように監視員がついていた。その止まった車中で一泊した。弁当は白米におかずもつくものだった、特配であろうか。昼間は移動で、下関から門司、直方、伊田線で赤池に到着した。途中、列車の時刻はまったく知られることがなかった。赤池では二〇室ほどある寮に入り、以前からいた九州の人たちと一部屋四人で混住した。二三日休養した後、現場へ、採炭現場の監督をした。

しかし、九月七日頃、釧路の実家に召集令状が届いた。九州へは電報で知らされる。「九月二五日、帯広の北部九一部隊に入隊せよ」とあり、

庶路炭鉱からの第二陣が赤池炭鉱に到着した翌日の九月一八日の朝一番で出発、二一日釧路に帰着した。

三ヶ月の兵役の後、再び赤池炭鉱へ戻った。メタンガス濃度や空気量を測定する仕事をした。食料事情は悪く、海水に浸り酸っぱくなった雑穀を食べた。

平井重秋（一九二六年生・雄別炭鉱鉄道尺別炭鉱→三菱鉱業新入炭鉱）

一九三九（昭和一四）年、高等小学校を卒業し、測量見習として尺別炭鉱へ入った。尺浦隧道の測量に助手として携わった。一九四二〜四三年、札幌石炭坑技術員養成所入所した。中島公園や藻岩山で実習を行なった。養成所の教員は、札幌工業学校、北海道帝国大学や白石にあった爆発試験場の先生であった。社内で年間二〜三人が選拔され、入所した。一九四四年、助手係員になった。当時、緑町一区にあった寮に住んでいた。しかし、尺別炭鉱は八月に休坑となった。そして私は第一団として九州へ向かった。「九州炭増産尺別突撃隊」という腕章をした。専用列車で、尺別からは新入・鞍手炭鉱に行った。新尺別駅でみんな見送ってくれ、車両の班長を務めた。実際は弁当配布などの雑用であった。荷物はバックひとつで、着替え、安全帽、個人持ちの測量機器を持参した。

新入炭鉱へ到着し、上新入・植木両坑の測量を、尺別からの三人のみの班で担当した。尺別炭鉱からは、六坑・七坑・上新入坑・植木坑へ配属となった。植木坑は「夫婦がランプでトロッコを押すような」小ヤマで、掘り尽くした後を掘り直す感じだった。

尺別炭鉱では当時、磁北を基準に坑内測量を行っていた。札幌の養成所でもそう習った。しかし、九州は真北で測量していて、もとからい

た測量担当が書いた図面に坑道を書き加えると図面が合わなくなることがあった。

寮は二人で一部屋、新入六坑にあった。暖房は七輪に練炭で寒かった。同部屋は採炭の中野氏、隣の部屋は、高木氏と青田氏（運搬）がいた。この下宿で尺別出身者はこの四人のみであった。主食はさつまいも入りごはん、ビワや柿を九州の仲間たちが持ってきてくれ、食べた。

一〇月、召集令状が実家に届き、門司への入営を命じられた。その後取り消されるが、初山別（北海道留萌管内）の実家にいったん戻り、冬を越した。一九四五年四月、再び新入炭鉱へ向かったが、再度六月召集令状が届き、旭川へ入営した。そして樺太へ、敷香で初年兵教育を受けた。八月にソ連軍侵入、国境の町古屯へ向かい、弾薬輸送の警備を行った。「日本は勝った」とのデマも流れた。白旗掲げたソ連軍戦車にだまされた。武装解除後、「スターリンの捕虜だ」と言われ、持ち物全てを取り上げられた。北樺太・アレキサンドロフクスヘ一〇〇〇名近くで移動、うち約一〇〇名を残してシベリアに再移動させられた。私は北カラフトに残留し、捕虜として作業をした。

一九四六年一二月、引き揚げとなる。歩いて真岡まで戻り、引揚船白龍丸・雲仙丸で函館へ、そして初山別の実家に戻った。

しかし、「籍はそのままだから戻ってこい」と言われ、再び一九四八年、尺別へ。閉山まで測量ひとすじに働いた。大きな仕事は、一九六三年のベルト斜坑、東卸・北卸の連絡坑道の測量であった。閉山後は、釧路市内の東邦測量（現東邦コンサルタント）で定年まで勤めた。

〔終戦後も転換先へ残留〕

鎌田悦仁（一九二一年生・太平洋炭硯別保坑→三井鉾山田川鉾業所）

舌辛尋常小学校高等科を卒業後、一九三六（昭和一一）年四月、一五歳で雄別炭硯鉄道に就職し、保線作業に従事した。そのため雄別炭硯自体はよくわからない。一九四〇年に退職し、二〇歳の成人を機に兄が働いていた太平洋炭硯別保坑に転職、坑内運搬夫として勤務した。二二歳、一九四二年一月より兵役にいたが、五月病気のため退役し、別保坑に戻った。

一九四四年八月、三井鉾山田川鉾業所へ行くこととなった。出発は別保坑選炭工場隣接の駅から専用列車で出発、大勢の家族に見送られた。私は若かったこともあり、未知への憧れからうきうきした心境であった。九州まで約一週間あまりの旅程であったが、途中は戦時下のため列車のカーテンは下ろしたままで、景色も見ることができず寝てばかりいた。田川では寮へ入った。最初の勤務坑は伊加利坑、そして田川一坑であった。仕事は掘進夫、その後採炭夫となった。発破のかけ方を工夫し「延び」の新記録を更新、表彰された。

休日の楽しみは、郊外への買い出しを兼ねたピクニック、釣り。果樹園へも行った。会社の運動会には積極的に参加し、多く入賞した。

二三歳で、寮母の娘と縁があり結婚した。戦争中のため結婚式も質素で新婚旅行もなかった。

終戦後、仲間たちは釧路に帰還したが、私は悩んだが子どものこともあり、引き続き勤務、残留することにした。随分悩んだ。昭和二年に救護隊に入隊。これを機会に好きな酒を断ち、いつ召集があっても良いように備えた。お酒はその後飲んでいない。救護隊では鉾員であった

が副隊長を勤めた。戦後の混乱期には地域警備員、PTA役員、労組の役員など、地域に根付くために努力した。

昭和三〇年代になると石炭業界も石油との競合も激しく、相次ぐ合理化により閉山が進んだ。兄弟ヤマの三池鉾の大会議もあり、私の働く田川鉾でも閉山が噂されはじめた。妻と相談し、優良炭鉾として稼働中の故郷、父母の住む太平洋炭硯の系列会社に就職することにした。一九六二年、転換以来一七年九ヶ月で田川鉾業所を離れた。

米矢辰松（一九二八年生・雄別炭硯鉄道尺別炭硯→三菱鉾業鞍手炭硯・

現鞍手町内在住）

群馬県出身。父、吾一が炭硯勤務だった。他に就職予定であったが（満鉄だったと思う）、知り合いの軍人に「炭硯が良からう」と言われ、炭硯へ就職した。一九四三（昭和一八）年か四四年、雄別炭硯鉄道尺別炭硯に勤めた。一九四四年八月、九州への転換が決まり、尺別では坑内ケールの撤去も行った。

尺別炭山駅からの列車は、カーテンも開けられずの一週間だった。各駅で差し入れがあり、青森ではリングをもらった。通路側の座席に座った。父も別の列車で九州へ向かった。方城・上山田・鯉田など、三菱系の炭硯へ向かった。

植木駅で降りたが大雨の後で、町は水に浸かっていた。荷物を頭に抱えて、協和会館へ向かった。当初は七坑「コウフウ」寮にいたが、後に共愛寮へ移り、六坑の電気担当となった。共愛寮は二階建て二棟で一部屋は八畳くらい、一部屋に三〜四人か、あるいは二人だった。寮の中ではあまり交流はなかった。

高等小学校が旭町の高台にあり、通った記憶がある。

父とは違う部屋だった。仕繰の先山で、朝鮮半島の人を使っていたが、生活は酷く、逃げられた。勤労課が酷いことをしていた。逃げてきた後、父の所へ来ていた。

年を越した頃、家族が来た。

終戦までは仕事ばかりで、帰ったら寝るだけだった。休日はあったが、休業日に整備があるので休日出勤が多かった。

B 29のレーダーを妨害するための錫のテープを投下するため、山口からの六〇Hz送電がよくストップした【当時、九州内の一般電力は五〇Hzであった】。自社の鯉田発電所もあったが、そのストップによる電力不足により揚水不足をきたした。

六坑は本社だったから、あちこち行かされた。上山田や鯉田へも、電話交換機の修理へ行った。機械が故障すると、「生産妨害」と見なされ、修理に入ると憲兵から「故障なのか、故意なのか」と、いろいろ聞かれた。勤労課も一緒だった。

同じ電気屋の横山氏や加賀屋氏は、釧路へ戻ったが、私は自然と筑豊に残り、閉山まで鞍手炭鉱にいた。五く六軒は尺別炭鉱出身者が残っていて、親同士は付き合いがあった。私は仕事ばかりで、付き合いなかった。

〔鉱員の家族〕

宮島春子（一九二八年生・長女）・石山美代子（一九三六年生・三女）・酒井多美子（一九三八年生・五女）〈旧姓有元・転換対象者の妹〉
・転換対象者・有元秀雄（一九三一年生・長男・太平洋炭鉱春採坑↓

三井鉱山三池鉱業所）

一九四四（昭和一九）年四月、兄の秀雄は小学校を出てすぐ一二歳で太平洋炭鉱へ就職した。安全灯室に勤務した。母（有元ミサヲ）が修理工場にいたので、知人の紹介だった。

九州へ行くこととなったとき、相談所にいた佐藤友信氏【前出】に「こんなアンチャコ【若い人】がなぜ行くんだ？」と言われた。母と三女が会社「長男で一人息子だからよしてくれ」と申し入れたが、聞き入れられなかった。

出発となる春採駅に三女と母だけで見送りに行った。母があんまり泣くので、入舟町から渡し舟に乗って釧路駅へ先回りしたが、兄を探し出すことはできなかった。

三池では、「小さい子会社」に行つたと聞いている。石炭はいっぱい出た。兄のいたところは朝鮮人が多かった。若いからみんなと仲良くなれた。

戦争が終わつたらすぐ帰つてくると思い、何度も鉱業所へ聞きに行つた。一九四七年秋になつてようやく帰つてきた。手紙には「みんなと仲良くなったから、もう少しいれ【いなさい】」帰してくれない」とあった。三年も帰つてこないの、母は気が違うくらいだった。三池ではシャトルカーの運転を習い、太平洋炭鉱に戻つてもすぐシャトルカーの運転をした。しかし、そのため一九五四年のガス爆発事故に遭い、亡くなった。

兄は一切、余計なことを話す人ではなかった。しかし、「戦争が終わつてから、いじめられた」「お前たちに言っても分からないよ、この苦労は」と、釧路に帰ってきてから一時、イライラしていた。

九州へ行つてから、手紙のやりとりはあった。兄の日記もあったが、母に読ませたくないので破り捨てた。日記には、終戦後「ご飯を食べさせてくれない」「朝鮮人がいじめると書いてあった記憶がある。終戦

までは「楽しい」「家を頼むな」と手紙にあった。

「職員の家族」

高橋 幹男（一九三二年生・父 鶴吉…太平洋炭硯春採坑↓三井鉱山三池鉱業所宮浦鉱・職員）

父、鶴吉（当時四三歳）が一九四四（昭和一九）年八月、転換第一班として出発。家族は同年一二月に大牟田市に移住、一九四六年三月に釧路に帰るまでの約一年半過ぎた。私は当時小学六年生から中学一年生にかけてであり、炭鉱労働についてはわからない。

一九四四年八月、父は鉱業所前広場での結団式に臨み、釧路臨港鉄道春採駅から臨時列車で出発した。当時父は技術職員で班長を務めていたため、号令をかける予定であったが、岡田利春氏に代わってもらった。家族は、小高くなっていた杜宅の前で見送った。

目的地の大牟田には一週間かけて到着した。宮浦鉱に配属され、同僚の渥美潤氏、川合三代治氏と一緒にあった。宮浦鉱は市内に近く、周辺は鉄鋼・ガス・コークスなどの製造工場が多くあり、大牟田工業地帯と言われていた。

父が出発してから二ヶ月後、「家族の移住が可能になった、皆で来るように」の手紙が届いた。しかし、当時、母は病気で倒れ半身不随の状態であり、長時間の列車の旅には到底堪えられそうもなく困惑した。しかし母は気丈にも行くことを決断し、三男三女、計七人の大所帯で出発した。一二月、父の出発時と同じように、春採駅から三両編成の臨時列車で出発した。下関駅まで途中下車することなく、青函連絡船も乗ったままの状態であった【客車の航送については不明】。食事は折詰め弁当

が支給された。途中、何度か空襲警報が発令され、その都度臨時停車、解除になり動き出す、その連続であった。

出発から一週間でようやく大牟田駅に到着した。大きい荷物を背負い、手に下げて降り立つと、声を掛けられた。「どこから来たのか」と尋ねられたのであろうか、九州弁で何を言っているのか解らず、えらい所に来たと思いがられる心境であった。その日、父が下宿していた食堂の二階で一週間ぶりで畳の上で疲れを癒した。

翌日、会社が用意してくれた杜宅に入居した。一棟四戸の二階造りの三LDKで、台所は土間、煮炊きの燃料は石炭であった。五右衛門風呂は底に板を敷いて入ることがわからず、そのまま入り火傷しそうになり、下駄を履いて入り直した。

縁側に釧路から送ってもらったタコを干していたら、これを見た人に「北海道の人はヘビを食べる野蛮人みたいだ」と誤って伝えられたこともあった。

私と弟は三学期から小学校に編入学した。学校までは近く、歩いて二分であった。この頃、一番上の姉は会社勤め、二番目の姉は母を助け家事手伝いと、ようやく落ち着いた生活が始まった。

中学校は熊本県【荒尾市内】で、通学に片道四〇分もかかった。学校ではお決まりのよそ者いじめに遭った。「北海道で熊と一緒に生活していたのだろう」などとかかわれた。しかし、授業で音読の声が大きく先生に褒められたことなどもあり、徐々に同級生から一目置かれるようになった。中学では副級長にも選ばれた。

当時の食糧は、米少量にイナキビなど雑穀類が多く、食べ盛りの私たちはいつも空腹であった。これを補うために近郊の農家に買い出しに

行った。重い荷物を背負った七里の道程であった。

当初は空襲警報が発令されても敵機は通過し、爆弾投下はほとんどなかったが、時が経つにつれ連日空襲となり爆弾・焼夷弾に加え機銃掃射が激しくなった。その都度、防空壕に避難した。大牟田市は工業地帯なので、特に狙われたのであろうか。高射砲で応戦するがほとんど命中しないようであった。一度、B 24 爆撃機が中学校近くの田圃に墜落したのを見た。

七月に入ると空襲は一段と激しさを増し、米軍機による絨毯爆撃で市内は火の海になった。防空壕でじっと治まるのを待つばかりであった。

一夜明けて周囲を見渡すと、全てが焼け野原となっていた。隣の小学校も跡形もなく消え、焼け残ったのは私達の社宅の1棟だけであった。空襲の恐ろしさを実感した。【七月二十七日夜の空襲と思われる】

二、三日して被災地を見に行ったが、どこも一面焼け野原で、熱く歩けない状態であった。学校は負傷者の収容施設となっており、当分休校となった。焼夷弾の火傷で転げ回る負傷者を、今でも思い出す。

終戦は自宅で玉音放送を聞いた。やっと終わったかと、空しさよりもなぜかほっとした。見渡す限り廃墟と化した街の姿と、戦争に負けた虚脱感と、これで空襲がなくなるとの安堵感が交錯した複雑な思いであった。

終戦後、中国人、朝鮮人の仕返し起きた。過酷な労働を強いた日本人の上司を捜しはじめた。身に覚えのある人は、これを察していち早く逃れたと聞いた。父は係員であったが、その対象外であったようである。

一二月、母は病気を再発、大牟田で帰らぬ人となった。享年三九歳の若さであった。親戚もなく会社の協力で何とか葬儀を終えたが、火葬場

も空襲で焼失していたため、野焼きで荼毘に付した。

その後、釧路の叔父から「太平洋炭砒が再開し、九州へ行った者の受け入れが始まったので早急に帰ってこい」という手紙が届いた。父は妻を亡くしたショックもあり迷っていたが、子どもたちのことも考え戻ることを決めたようである。釧路から叔父二人が迎えに来て、翌一九四六年三月、総勢一〇名で大牟田を発った。列車は満員で入口からは乗車できず、窓から強引に乗車をし、東京まで立ちっぱなしであった。途中、東京の叔母宅で三日間休養し、釧路へ到着した。

「転換先の炭鉱労働者」

佐々木義己（一九一七年生・三井鉱山田川鉱業所・現田川市内在住）

一九三四（昭和九）年、田川四坑（田川郡川崎町）に採用され、半年間は試雇。一九四〇年結婚。坑内機電担当。坑外の事務も担当した。

一九四四年九月一六日、長崎の相浦海軍司令部に召集された。「坑内はどんな感じか、どんな仕事をするのか。お前の係はどんな仕事をするのか。」など、仕事の内容も聞かれた。「（四坑は）二〇〇〇人ほど従業員がいます」などと答えた。何とか召集を免れ帰れる方法はないかと思っていた。「孫子の兵法を研究しています」と司令官であった銅直中将に答えると、歳はあまり変わらないと思われる中将は、手のひらを返すように柔らかな対応となった。二〇日、「今日限りで除隊とする、今日のところは帰れ」と言われ、しぶしぶと帰ることとなった。下士官が、「午後八時くらいの上り列車があるから早く帰れ」、「なんて運のいい奴だ」と言われ、パン六つなど三日間くらいの食料を持って帰らされた。他の兵には「営門出たら万歳三唱して帰りなさい」とも言われた。二〇日の

夜行列車に乗った。翌二一日の朝一〇時頃、豊前川崎の自宅へ戻った。会社へ挨拶に行くと、深刻な人手不足でもあり、「よく帰ってきてくれた」と歓迎された。

長崎から帰ってきたら、それまでいなかった北海道の人が大勢いたので、大変驚いた。その全員は坑内担当で、採炭についていた。話す機会は稀であった。四〇人くらいの元気盛んな人たちであった。私は機電係員で甲種保安係の有資格者（助手係員のような地位）であったが、坑外で事務も担当していた。そのとき、事務所には一五、六歳から六〇歳代まで二三人の女性が働いていた。坑長に「佐々木さん、今日から事務所の女性を監督してくれ。事故がないように」と言われ、その役を務めることとなった。本来は熊野事務長が担当すべきところ、私が担当することになった。

北海道からの人たちは「あつさり」していて、おもしろい。若くて健康的、しかも独身者ばかりで、若い女性にはすぐ声を掛けていた。もちろん仕事は良くやったし、会社も評価していた。ケンカや揉め事も聞いたことがなかった。現場の先山も大喜びであった。北海道の人たちから、ヘチマのような形のカボチャをもらった。とても美味しく、妻も喜んだ。その四〇人は同じ寮に住んでいた。管理人の畠山氏も、「いい人ばかりじゃきな、いいばい」と言っていた。寮は北海道でない人も一緒だった。その後、空室となっていた捕虜収容所に移った。

坑内では、先山はもともと田川の人が担当していた。もう五〇歳以上、六〇歳近い人たちだった。田川にはもう、子どもと年寄りしかいないような状況だった。言葉が違っていても、炭鉱の経験者なのですぐ仕事に慣れていた。終戦後、何人かは北海道に帰らずに筑豊に残った人もいた

が、食べ物豊富になると皆帰ってしまった。

四、証言を聞いて

これまで釧路炭田での歴史として、あまり注目をされてこなかった九州への労働力移動「急速転換」について、多くの証言を得ることができたことは、大きな成果だと言えよう。一方で、終戦から六五年以上が経過し、得られる証言は当時二〇歳前後までの若年労働者がそのほとんどとなり、これには職員も含まれているものの、管理者層からの証言が得られないのは残念でならない。また、出身炭鉱が太平洋炭硯春採坑にやや偏ったことは所属人数からしてもやむを得ないが、今後も継続して経験者に対する聞き取りを行いたい。

「急速転換」経験者からすれば、この約一年の経験はその人生において非常にインパクトがあり、記憶は鮮明である。戦時下の炭鉱労働、朝鮮人・中国人・俘虜の労働、大牟田空襲、長崎への原爆投下、広島や大阪の惨状など、戦争中・終戦直後の日本を往復縦断した、炭鉱労働者が経験したもうひとつの「釧路の」戦争記憶は、その面でも価値を持つ。

残された資料と証言をつきあわせると、必ずしもその通りに実施されていたわけではないことは、今回の証言からも明らかである。例えば、樺太及釧路に於ける炭硯勤労者、資材等の急速転換実施要綱には「転出に際し到着後直ちに作業を写し得る如く左記物件を携行せしむ」とあるが、実際にはほとんどの場合、それら「物件」は携行していない。人員輸送においても、その発着は実際は炭鉱の最寄り駅（私鉄や専用鉄道等を含む）である。職員は人事が異なり、容易に釧路へ復帰することができなかったことなどは、今回新たに記録されたことである。

証言記録を行った藤原芳夫氏は日記を残しており、現在その整理が行われている。また布施光男氏は当時の金銭出納帳を残している。戦争末期一年間の炭鉱労働を活写していると期待される。

今後は、これらと「石炭統制会東部資料」（茨城県歴史館蔵）、戦時下の石炭輸送状況についての記録を含む「柏原兵太郎文書」「八田嘉明関係文書」（国立国会図書館憲政資料室蔵）等の解析をさらに進め、今回復得られた証言とあわせ研究を進めていく。

なお、「急速転換」について、研究途上において報道機関も注目することとなり、北海道新聞・東京新聞・西日本新聞での記事掲載のほか、NHK「土曜プラス」（二〇一〇年三月）、「市民たちの戦争・ヤマの戦争強いられた増産」（同年八月）・九州沖縄スペシャル・地底の戦場」（同）として、急速転換経験者のインタビューも含め番組化された。「市民たちの戦争」については未放送の証言も含め、NHKのインターネットサイトで視聴することができる⁽⁸⁾。

五. 文献等

- (1) 矢野牧夫（二〇〇六）「昭和一九年夏、樺太の炭鉱閉山」（自費出版）
- (2) 大井 篤（一九七五）「海上護衛参謀の回想 太平洋戦争の戦略批判」原書房

- (3) コーヘン（一九五〇）「戦時戦後の日本経済上」岩波書店

- (4) 「国有鉄道鉄道統計累年表」（交通統計研究所）

- (5) 三ッ輪運輸（一九八六）「三ッ輪運輸五十五年史」同社

- (6) 例えば「警報下、太平洋炭鉱の破兵生産の手緩めず」北海道新聞一九四五年六月三〇日など

- (7) 茨城県立歴史館所蔵文書「石炭統制会東部支部資料」

- (8) NHK「戦争証言アーカイブス」http://cg2.nhk.or.jp/shogenarchives/bangumi/movie.cgi?das_id=D0001220043_00000 など



写真1 「三川坑技術員養成所修了記念」
（佐藤友信氏蔵）